



問 「肥満の漢方治療とはどのようなものですか？」⑪

答 肥満の漢方治療について、お話を続けます。今回は、表の「気逆・気鬱を伴う場合」の四番目、抑肝散についてお話します。

抑肝散は、保嬰撮要という書物の中で紹介されています。構成生薬は、釣藤鈎、柴胡、甘草、当帰、茯苓、白朮、川芎です。

「ツボの流れの一つである」肝経の熱のために、発熱して歯をくいしばるようになったり、恐れおののいて動悸（どうき）がして、寒けがしたり熱くほてったりする。また、胃腸に影響して、嘔吐（おうと）したり、おなかが張って、食事が十分にとれなくなり、じっとして横になることができず、睡眠が不安定になるものを治す」と記載されています。

図は、私の漢方の師匠が描かれた

抑肝散の腹証図です。みぞおちとおへその中間あたりから下にかけて動悸がみられます(①の×)。そのすぐ左の筋肉(腹直筋といいます)が硬くなって、抑えると痛みます(圧痛といいますが、②の×)。みぞおちから下にかけて、広い範囲にむくみがみられます(③)。鼠径部が硬くなって、圧痛があります(④)。このうち、

①と②、特に②が抑肝散に特徴的な所見で、気の流れが悪くなっている証拠です。生薬では、釣藤鈎を用いる目標となります。③のむくみは、水の流れを改善する生薬である茯苓と白朮、また、④は血の流れが悪くなっている証拠で、当帰と川芎を用いる目標となります。図では省かれています。抑肝散は、からだの左側に問題が

あるときに、左右のバランスをとるお薬です。

肥満の頻用処方

固太りタイプ

ぼうふうつうしょうさん だいさい こうとう
防風通聖散、大柴胡湯、
だいじょうきとう
大承気湯

瘀血を伴う場合

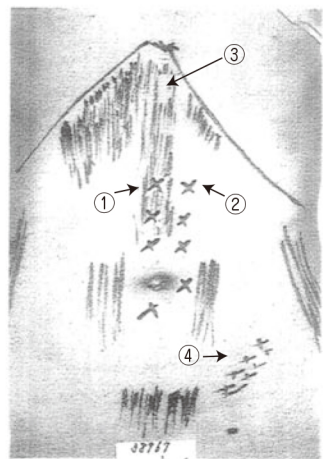
とうかくじょうきとう けいし ぶくりょうがん
桃核承気湯、桂枝茯苓丸

気逆・気鬱を伴う場合

さい こ かりゅうこつ ぼ れいとう とうかくじょうきとう
柴胡加龍骨牡蠣湯、桃核承気湯、
か み しょうようさん よくかんさん
加味逍遙散、抑肝散、
はん げ こうぼくとう
半夏厚朴湯

水太りタイプ

ぼう い おうぎ とう えっ び かじゆつとう
防己黃耆湯、越婢加朮湯、
く み びんろうとう
九味檳榔湯



(日本東洋医学会、「漢方医学テキスト」)

図